

コンテンツ

■ トップコミットメント	1
■ 座談会	2
■ 京都大学環境憲章	4
■ 京都大学と環境	6
■ 地球温暖化防止に向けて	8
■ アスベスト問題について	10
■ 化学物質等について	11
■ 教育・研究の推進	12
■ 社会貢献・コミュニケーション	18
■ ステークホルダー委員会について	20

編集方針

- 2004年に定められた「環境情報の提供の促進等による特定事業者等の環境に配慮した事業活動の促進に関する法律」により、京都大学を含む特定事業者は、環境報告書を作成し公表することが義務づけられました。京都大学環境報告書2006は、それを受けた第一回目の取り組み結果(2005年度の報告)です。
- 作成にあたっては、京都大学環境・安全・衛生委員会の下に、学内の関係者からなるワーキンググループを立ち上げ、そのメンバーが情報・データ収集や執筆・編集にあたったほか、ステークホルダー委員会(参照:ダイジェスト版20ページ、詳細版78~82ページ)を設置し、学内外の関係者より意見を頂いたり、学生の方に取材・執筆に加わっていただいたりするなどしました。
- その作業の中で、法律の要求を満たすよう情報を整理し、社会に向けて窓を開きつつも、まずは学内の方々への周知・浸透が第一、との方針が明確になりました。
- そこで、詳細版として、情報やデータを網羅的に公開するほか、主に学内の環境コミュニケーションツールとして、ダイジェスト版を編集・発行することとしました。所属や立場に関係なく、一人でも多くの方にお読みいただきたいと考えております。
- 詳細版については、現段階で可能な限りの情報を収集し、信頼性が確保できると判断したものを全て取り上げています。ホームページ上では、環境報告書ガイドライン(2003年度版・環境省)において記載が望ましいとされる項目と対応した目次も設けました。また、巻末に、指標一覧及びデータ集を設けており、今回用いた指標やデータの定義や算出方法、部局単位の数値データをご覧いただくことができます。
- なお、少しでも実感をもっていたため、例えば実績値については、合計値とともに、一人当たりの換算値を示すなどの工夫を行いました。ただし、分母には病院患者数等が入っていないこと、学生を含む本報告書の対象者全員を分母としていること、などに注意が必要です。
- 是非、ご一読いただき、アンケートにもご協力いただけますよう、よろしくお願致します。

公開方法

- 京都大学環境報告書2006(詳細版):ホームページにて公開
 - 京都大学環境報告書2006(ダイジェスト版):ホームページにて公開 + 印刷物にて配布
- 京都大学ホームページ
(<http://www.kyoto-u.ac.jp/kankyo/report.html>)



トップコミットメント

京都大学の約束。



京都大学 総長 尾池和夫

2005年は、地球温暖化防止に向けた京都議定書の発効や、「愛・地球博」の開催など、象徴的な出来事が続きました。京都大学においても、4月に環境安全保健機構が発足し、早々にアスベスト問題という重大な環境問題に直面しました。幸い、学内外のご理解とご協力を得て、適切に対応することができました。しかし、京都大学の環境問題に対する取り組みの真価

が問われるのは、これからです。

京都大学が掲げる環境憲章は、教育・研究の推進、社会貢献、すべての大学活動における環境配慮を明確に謳っています。その実現に向け、学術的な視点と思考力、構想や行動力を生かし、京都大学の環境管理に進展を取り組み、地球環境問題に貢献します。具体的には、次の三つをお約束します。一つは、大学の活動が与えるすべての環境負荷を小さくすることです。大学というところは、実にさまざまな活動の混合体です。これらの活動が与える環境負荷を適切に評価し、削減します。二つには、環境マインドを持った人材を輩出することです。そのような役割を担うことは教育機関である大学の使命であり、社会的に望まれていることでもあります。最後は、これらの情報を積極的に開示することです。これまで大学は、学術領域の牽引役として多大な貢献をしてきました。しかし、それだけで社会貢献が十分に果たされているとは言えません。本来、大学と地域社会とは協力連携すべきものです。社会連携の一環として、本学の環境活動が適切なものであるかどうかを、地域社会にご判断いただくための情報を開示します。京都議定書が生まれたこの地において、京都大学は、基本理念に基づいて地球環境保全に努める所存です。

COLUMN

尾池えんぴつのなぞ



尾池総長のデスクで見つけた不思議な鉛筆。

何かが違う…そう、少し長いのです。

これは、短くなった鉛筆を、新しい鉛筆の先につけたもの。

ねじれに強い接着剤でくっつけることで、鉛筆削りの回転にも耐え、最後まで使えるというアイデア。